

第24回 窪田高明 神田外語大学名誉教授
大学としての進化を支え続けた30年

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

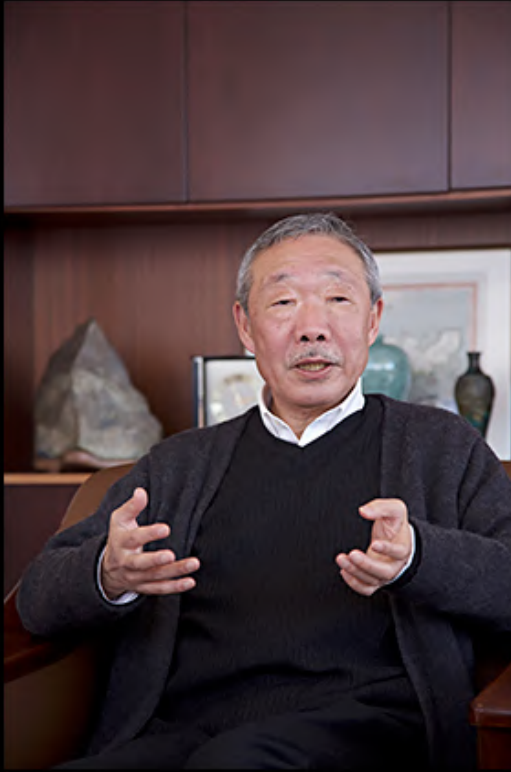


昭和62（1987）年4月、千葉・幕張に神田外語大学が設立されました。その目的は、まず日本の文化を理解したうえで、外国の文化も理解し、そうした理解を踏まえて自分の意見を伝えられる若者をつくることでした。カリキュラム面で神田外語大学が従来の外国語大学と異なった点のひとつとして、「日本倫理思想史」を必修科目として位置付けたことが挙げられます。担当する窪田高明先生は開学以来、30年間にわたって神田外語の学生に日本を形成してきた思想の歩みについて教え続けてきました。副学長をはじめとする要職を務めながら、神田外語大学の教育を築いてきた窪田先生にお話をお伺いしました。（構成・文：山口剛／文中敬称略）

昭和41（1966）年4月、僕は東京大学に入学しました。当初は心理学を学ぼうと思っていましたが、東大における心理学は実験心理学や認知心理学などが中心で僕が考えていたのよりずっと理系的な学問でした。僕はどちらかといえば哲学に関心があったので、志望を変えて、文学部に進学した時には、思想系のコースを選びました。

僕は高校時代から少し登校拒否気味で、大学に入っても1、2年の時はあまり学校に行きませんでした。3年生になると大学は紛争に突入しました。僕も大多数の学生と同じく大学に反抗する側にいました。

大学紛争で授業がない時期が1年くらい続きましたが、徐々に授業が再開され、僕も授業に出席するようになりました。この時期に関心があったのは、倫理思想史です。人間が生きていくうえで、どういうことをよいと考え、何を重要視してきたかを考える学問です。当時の僕は、それを学ぶのが面白いと感じたのでしょう。ただ、この時はまだ学者になるという確固たる決意はありませんでした。



結局、大学に6年間在籍し、その間、「東大学力増進会」（以下、学増）で講師として教え始めます。昭和46（1971）年の夏のことだと思います。東大学力増進会は高校受験用の予備校です。東大の学生がアルバイトとして始めた団体で、東大の学生や大学院生、卒業生が講師として中学生に教えていました。研究をしながら、空いた時間で生活費を稼ぐにはちょうどよい仕事だったのです。

僕は講師の仕事だけでなく、学増の運営の仕事にも携わりました。学増に参加しているメンバーはみんな仲間でしたが、やや難しい人がたくさんいました。そのような組織の運営に携わった経験は後々、役立ちましたね。

学増での仕事を続ける一方で、大学で哲学や倫理学を教えるようになりました。昭和55（1980）年4月からは専任講師として松本短期大学で教えるようになり、その後は茨城大学や山梨大学といった国立大学でも日本倫理思想史を教えました。（1/8）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第24回 窪田高明 神田外語大学名誉教授
大学としての進化を支え続けた30年



一般教育の先生方の充実が
新学科設立の「原資」となる

神田外語大学とのご縁は、僕の恩師である相良亨先生です（※1）。神田外語大学の設立に尽力された古田暁先生と想いにされていて、「幕張に大学を創るのだけど、誰か来られる人はいますか？」と聞かれたそうです（※2）。相良先生は、「それなら窪田くんを」と僕を推薦してくれたのです。

古田先生は、講談社インターナショナルという出版社で“Kodansha Encyclopedia of Japan（『英文日本大百科事典』）”を編集された方です。

日本で評価されていない職業のひとつに百科事典の編集長があります。僕は、大学の学長なみに大変な仕事だと思います。神田外語大学において古田先生は、僕が在籍していた一般教育のトップでしたから、たくさんお話し、指導も受けました。大変に立派な方でした。もっとも、糖尿病を患っていたのに、ようかんを食べ過ぎてしまうなど、とても人間らしい一面もお持ちでした。

神田外語大学は開学した当時、卒業要件が140単位で、そのうち32単位は一般教育科目でした（※3）。ですから、一般教育の先生方が教員全体の3分の1を占めていたのです。



それと神田外語大学の場合、開学にあたり、異文化コミュニケーションを専門とする学部にしよというアイデアもあり、文部省と相談していたと聞いたことがあります。ただ、当時はカタカナの学部名は認めないという、今からは信じられない状況で、「コミュニケーション学部」を名乗ることは叶わなかったのです。

その時に集まった語学以外の先生方の多くが一般教育に在籍していました。そして、平成13（2001）年4月に国際コミュニケーション学科を設置した際、そういった先生方が必要な教員数を満たす「原資」になっていったのです。（2/8）

1. 相良亨（さがらとおる）：東京大学文学部名誉教授、倫理学者。平成12（2000）年10月永眠。享年84歳。
2. 古田暁（ふるたぎょう）：神田外語大学名誉教授、異文化コミュニケーション研究所（現・グローバル・コミュニケーション研究所）初代所長。神学者としての深い教養と百科事典編集長としての人脈を生かし、神田外語大学の設立に尽力。平成25（2013）年4月永眠。享年84歳。
» 第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授『異文化コミュニケーションの夜明け』
3. 1987年「講義要覧」より。

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第24回 窪田高明 神田外語大学名誉教授
大学としての進化を支え続けた30年



「日本の思想や文化を学ばせたい」
必修科目となった日本倫理思想史

僕自身は、大学開学の年から、「日本倫理思想史」を教えてきました。日本倫理思想史は日本人というものが、精神的にどのようなことを重んじて生きたのかを学ぶ学問です。日本とは何か？ 国際化のなかで、日本人の思想の流れをどう捉えるのか？ 日本の未来を考えるからこそ、その過去を振り返る。歴史を学ぶ意義はそこにあるのです。

驚くべきことに当時の神田外語大学では日本倫理思想史が卒業に必要な「必修科目」だったのです。佐野隆治会長は、神田外語の学生には日本の文化や思想をきちんと学ばせたいという気持ちを持った方でした（※4）。開学準備をされている時、古田先生と佐野会長が、日本倫理思想史は必修科目にすべきだとお決めになったのでしょう。

そもそも、大学にこの科目があること自体が珍しい。東京大学の倫理学科でさえ、日本倫理思想史という科目は設定されていませんでした。この分野の他大学の先生方からは「窪田さん、ずいぶん面白い大学に行きましたね」と言われたものです。

僕は日本倫理思想史の授業で古代から近世にいたる日本人の思想の流れを講義するとともに、近現代における恋愛についてもよく取り上げました。学生が学問に真剣になるのは、自分にとって非常に切実な問題であるか、もしくは、知的刺激を受けるかのどちらかでしょう。神田外語の学生たちは、非常に素直なので、倫理思想史の講義も関心をもって受けてくれました。



数年後、僕はこの科目を卒業要件の「必修科目」から「選択科目」に変更してもらいました。外国語を学びに神田外語大学に入って、日本倫理思想史ができずに卒業ができないというのは、さすがに気の毒なことですから。

思えば、この頃から日本の大学教育において、日本の文化や思想史を学ぶことが見直され始めていきました。それ以前は、大学が日本の思想や文化に関する教育を強調すると、戦前・戦中のニュアンスで「保守的である」と受け止められていたのですが、潮目が変わりました。社会風土が変わったということです。

各大学で日本の思想や倫理の科目が設けられ、この分野の教員が足りないという時期もあったぐらいです。神田外語大学が開学時に日本倫理思想史を必修科目に位置付けたのは、こういった流れの先駆けだったといえるかもしれません。（3/8）

4. 佐野隆治：学校法人佐野学園第3代理事長、後に同会長。神田外語大学創立者。平成29（2017）年3月永眠。享年82歳。
» 第1回 佐野隆治会長『学院が誕生するまでの日々』

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第24回 窪田高明 神田外語大学名誉教授
大学としての進化を支え続けた30年



開学以来の面接試験によって
神田外語には素直な学生が集まる

開学後、数年間の神田外語大学は非常に面白かったですね。個性的な学生ばかりがいたように思えます。入試のデータが不足していたため偏差値もよくわからない。そのせいもあったのでしょうか。かえって面白い学生が集まりました。また、英語の問題はネイティブが作成していましたから、学校の勉強をしているだけの高校生には受かりづらい試験だったかもしれません。そういった独特な内容だったからこそ、面白い学生が集まったのでしょう。

今でも行っていますが、神田外語大学では開学当初から面接試験を設けていました。面接試験のよいところは、面接の嫌な生徒は神田外語を受験しないことです。これがものすごく大きい。つまり「面接があるんだ」と思った瞬間に、真面目に受け答えするのが嫌な生徒は神田外語を受験しないのです。

「神田外語の学生は素直だ」とよく言われますが、そのひとつの理由は面接試験にあると思います。素直な生徒が集まるスクールカラーは、うちの大学にとって大きな財産になっています。

佐野隆治会長のお母様である、佐野さく枝先生のことよく覚えてます(※5)。さく枝先生は、佐野公一先生と神田外語学院を創設し、佐野会長とともに大学を開学された方です。大学開学当初、僕はまだ助教授でしたから、佐野学園のトップであるさく枝先生と親しくお話しする立場にはありませんでした。



それでも、とても厳しい方だったという印象は残っています。きく枝先生の周りには職員の方々は、とてもピリピリしていましたね。「ものすごく細かくて、鉛筆1本でも管理がずさんだと叱られた」と古参の職員の方がおっしゃっていたのを覚えています。

佐野会長は懐が大きい方ですから、担当を決めると予算と責任を与えて、細かいことは言いません。でも、任せきりだと予算の管理がおろそかになる場合もあります。きく枝先生は、公一先生や隆治会長を立てながらも、厳しく節約することを課しながら、大学を建学する資金を生み出していったのでしょう。

大学運営の原資のほとんどは、学生に支払ってもらう学費です。そのお金をずさんに管理したり、一部の研究にだけ利益があるような使い方をしてよいはずはありません。きく枝先生の厳しさは当然のことであり、私たちが常にその緊張感をもって大学運営に当たらなければならないと思います。

(4/8)

5. 佐野きく枝：学校法人佐野学園第2代理事長。神田外語学院の創設者、佐野公一学院長とともに、副学院長として学校経営と学生の教育に情熱を注ぐ。昭和63（1988）年1月11日、永眠。享年82歳。

» 第20回 佐野きく枝 神田外語学院第2代学院長『心の交流が争いのない世界を創る』

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第24回 窪田高明 神田外語大学名誉教授
大学としての進化を支え続けた30年



新たな学科設立を視野に入れ
教員をまとめる教務委員長に就任

開学当時、学長は小川芳男先生でした（※6）。英語教育界の重鎮でしたし、その当時、すでにご高齢だったので、お話しする機会はほとんどありませんでした。小川先生が亡くなられて、井上和子先生が第2代学長になりました（※7）。井上先生がいらっしゃった英米語学科と僕のいた一般教育は大学のなかで二大勢力でした。意見の一致しないこともあり、井上先生にはご迷惑をおかけしたこともあります。

でも、今になって思えば、井上先生は開学4年目で学長になられて、英米語学科のガバナンスでも苦労されていたし、何より大学全体を治めるのは大変なことだったと思います。何も分かっていない僕は「井上先生は権力者だからお強い方だろう」と決めつけていましたが、むしろ、非常に厳しい環境で学長の仕事をされていたのです。

平成5（1993）年、僕は『王権と恋愛 幸福の思想』という研究書を出版しました（※8）。井上先生はすぐに読んでくれました。井上先生との関係が変わったのはその時からです。以来、折にふれて温かい言葉をかけていただけようになりました。井上先生は日本を代表する言語学者ですから、研究を重要視されていました。僕が自分の研究成果を出版したことで、研究者として認めてくださったのでしょうか。



辛い思いをされながら学長の任務を果たされた井上先生でしたが、大学院やCoE（Center of Excellence：卓越した研究拠点）などご自身にとって、そして大学にとっても有益な実績を作れたからこそ、頑張りとおすことができたのだと思います（※9）。

平成10（1998）年、石井米雄先生が第3代の学長に就任されました（※10）。当時、神田外語大学には、教員側の管理職というのは学長以外には学科主任しかいませんでした。学科を横断する教員のまとめ役が必要ということで教務委員長が設けられ、韓国語学科長だった濱中先生が就任しました。濱中先生が退任された後、僕がその仕事を受け継ぐことになりました。その頃、新学科設立の準備も始まりました。僕は大学改革委員会の委員長も兼任しました。教えること以外の仕事が増えていったのはこの頃からですね。（5/8）

6. 小川芳男：神田外語大学初代学長。東京外国語大学で学長を2期務められた英語教育界の重鎮。平成2（1990）年永眠。享年81歳。
7. 井上和子：神田外語大学第2代学長。日本における言語学の権威。平成29（2017）年5月永眠。享年98歳。
» 第2回 井上和子 神田外語大学第2代学長『新しい試み、その可能性にかける』
8. 『王権と恋愛 幸福の思想』（ペリかん社）。平成5（1993）年12月初版発行。
9. 神田外語大学では、平成4（1992）年に言語科学研究科の博士前期課程を設置し、2年後の平成6（1994）年には博士後期課程を設置。平成8（1996）年には文部省（当時）からCoE（Center of Excellence：卓越した研究拠点）として認定された。
10. 石井米雄：神田外語大学第3代学長。京都大学名誉教授。平成22（2010）年2月永眠。享年80歳。

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第24回 窪田高明 神田外語大学名誉教授
大学としての進化を支え続けた30年



神田外語らしい教育の充実で
英語教育中心の大学から脱却

当時、神田外語大学の定員数は4学年合わせて、英米語学科が約800人、スペイン語学科が約80人、中国語約240人、韓国語が約80人でした

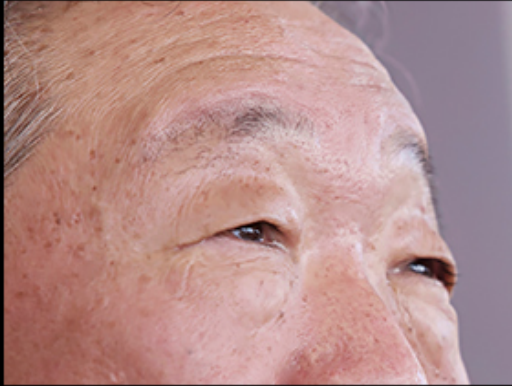
(※11)。英米語学科の学生が多いのは大学としてバランスがとても悪い。英語以外の広い関心をもった学生を吸収し、教育したいという思いから、「国際コミュニケーション学科」の設置が進められました。

もうひとつは「国際言語文化学科」です。東南アジア3言語（ベトナム語、インドネシア語、タイ語）とブラジルポルトガル語です。国際言語文化学科では、これらの言語を専攻として学びつつ、英語も重要視する2言語専攻という特徴がありました。「ダブルメジャー」ともいうべきカリキュラムであり、今では同様のカリキュラムを導入している大学が増えましたが、これも当時は珍しかったのです。

国際コミュニケーション学科、国際言語文化学科は平成13（2001）年4月に設置されました。これらの学科新設によって、神田外語大学は、「大学らしく」なったと思います。それまでは周囲から「英語だけ教えている大学」と思われていましたが、そこから脱却する第一歩でした。新学科設置で神田外語大学は自らの個性を打ち出せたのです。

平成14（2002）年4月、僕は副学長に任命されました。仕事としては、教員側のマネジメントです。当時はもうひとり、教員の副学長がいて、寺田美奈子先生が務めていらっしゃいました（※12）。寺田先生は学生生活に関する業務を担当されていました。





僕と寺田先生は副学長同士でよく話をしましたね。当時は今以上に、それぞれの学科の先生方が自分たちの殻に閉じこもって、学科の立場から物を考える傾向が強かった。学科の枠を超えて、大学全体の立場から「こういう風にしていきたい」と説得するのが我々副学長の大きな仕事でした。

僕は副学長の後、平成16（2004）年から企画調整主幹を務めて、平成22（2010）年にふたたび副学長に任命されました。教員のマネジメントという業務の内容は同じです。ただ、学長の個性や方針によって仕事の内容は変化します。

平成10（1998）年から学長を務められた石井米雄先生は地域研究や言語学で優れた業績を残された方です。学長の任期途中でしたが、平成16（2004）年に設立された人間文化研究機構の初代研究機構長に抜擢されました。国立歴史民俗博物館や国立国語研究所などの上部組織のトップです。言わば、大学の学長のさらにその上のポジションです。（6/8）

11. 昭和62（1987）年に開学した当時、神田外語大学の1学年の定員は英米語学科200名、スペイン語学科20名、中国語学科60名、韓国語学科20名だった。
12. 寺田美奈子：神田外語大学名誉教授。専門は生物学。平成26（2014）年9月永眠。享年72歳。

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第24回 窪田高明 神田外語大学名誉教授
大学としての進化を支え続けた30年



地域別の学科再編を実現し、
学科としてのスケールを大きくする

石井先生の後任は、外交官を務められてきた赤澤正人先生です（※13）。仕事をして驚いたのは、赤澤先生の仕事のスタイルです。例えば、式典のスピーチ。これまでの学長の方々は、すべてご自分で原稿を書かれたし、それに手を加えるなどもってのほかでした。しかし、赤澤先生はすべて用意するよう指示されました。

大使として各国との外交にあたってこられた赤澤先生は、「大使として私の発言は国の考えを代弁するものです。そこに私個人の考えが入ってよいはずはありません。同じように学長の言葉は大学全体の考えを代弁するものです。ですから、原稿はすべて公式な見解を用意してください」という考え方だったのです。

平成22（2010）年、酒井邦弥先生が学長になられたタイミングで、僕はふたたび副学長に任命されました（※14）。酒井先生はみずほ銀行出身ですが、退職後、東京外国語大学の理事をされていました。大学についてよく勉強をされており、人柄も慎重な方なので、大学の事情をよく考えた運営をされたと思います。



酒井先生は、ご自身で大学運営の問題点を発見して、「これはなんとかしないとまずいですね」と指摘をされました。その指摘の大きなものが、平成24（2012）年に実施した学科の改編です。それまでの6学科（英米語学科、スペイン語学科、中国語学科、韓国語学科、国際コミュニケーション学科、国際言語文化学科）を、4学科（英米語学科、アジア言語学科、イベロアメリカ言語学科、国際コミュニケーション学科）に改組したのです。

この改組の目的は、開学以来、増やしてきた言語専攻を改めて大きな領域で再編することで、教育の充実を図ることでした。地域別の学科編成が実現したことで、それぞれの学科のスケール感が大きくなり、一方で人事的な采配も柔軟性をもたせられるようになりました。

神田外語大学には、2年生以降を対象としたオリエンテーションもあり、学長自らが担当します。1年生対象のオリエンテーションキャンプは石井学長が始めたことですが、酒井学長はご自身が担当する学生のオリエンテーションをずいぶんと増やされました。ですから、酒井学長とマンツーマンで話したことがある学生が多いのです。本当に素晴らしい仕事、膨大な業務をやり遂げた方だと思います。（7/8）

13. 赤澤正人：神田外語大学第4代学長。外務省入省後、各国大使館勤務を経て、ドイツ・デュッセルドルフ総領事、ドミニカ共和国大使を歴任。
» 第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長『国際舞台を目指す学生に道を示す』
14. 酒井邦弥：神田外語大学第5代学長。みずほホールディングス元副社長。第一勧業銀行専務取締役として、3銀行をみずほ銀行へ統合する責任者を務めた。
» 第23回 酒井邦弥 神田外語大学第5代学長『学生が成長する舞台を作るために』

第24回 窪田高明 神田外語大学名誉教授
大学としての進化を支え続けた30年

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



学んだことが役立つかは運次第
でも、学生は勉強するしかない

これは僕自身が後で気付いたことですが、人生における可能性は自分が思っているほど多くなくて、ある決まった枠の中に自分を追い込んで、そこにあるものから選択をしているのです。僕の場合、それは大学で教えることでした。

僕が、今学んでいる大学生たちに言えるのは、すごく単純だけれど、学生は基本的に勉強が大事だということです。「勉強は裏切らない」なんて言いません。結果が出るかどうか分からないのですが、学生になった以上、勉強するしかない、ということです。

勉強したことが役に立つかどうか、それは運次第です。一生役に立たないかもしれない。学んだことが就職に役立つか、どうか。そんなことは誰にもわかりません。でも、学生になったからには、教室に通って、学ぶしかありません。

そして、学びを通じて友と出会い、語り合い、何かを楽しく感じられたら、それが大学で学んだ一番大きな収穫になると僕は思います。

教職員のみなさんには、自分のできることを一生懸命やってほしい。少子高齢化、人口減少が進行していく。それは厳然たる事実です。決して明るい未来を描ける業界ではありません。厳しい状況だからこそ、教職員一人ひとりが考え、自分にできることを一生懸命やってほしいと思います。



窪田 高明（くぼたこうめい）

昭和22（1947）年9月、東京生まれ。昭和47（1972）年3月、東京大学文学部倫理学科卒業。東大学力増進会での教育と運営に携わった後、松本短期大学講師に。昭和62（1987）年4月、神田外語大学の開学時に一般教育の助教授に就任。「日本倫理思想史」を専門とし、日本文化理解を重視する神田外語大学の教育の一端を担った。平成6（1994）年に同教授に就任。副学長、企画調整主幹、図書館長、日本研究所所長を歴任。平成30（2018）年10月、神田外語大学名誉教授に就任した。